

が制限され、鬱屈する感じです。だからこそ秩序と対局にある暴動に惹かれたのかもかもしれません。暴動が起こりえた一〇〇年前の社会から現在の秩序正しい社会へどのように変化したのか。この点を研究することで、自分の抱える鬱屈の来歴を明らかにしたい。そのことで、同じように鬱屈する人に何かを届けられるかもしれない。そう考えるようになりました。

つまり私は自らの抱える問題を歴史に託して表現しようとしたのです。これができるのが歴史学の力の一つだと思います。もしみなさんの中で、言葉にできない問題や息苦しさを抱えている人がいたら、一度歴史と正面から向き合い、歴史を通してそれを表現してみるとよいかもしれません。これがみなさんに伝えたいことの一点目です。

さて、修士論文から八年ほどが経ちました。八年経てば自分自身も変わり、社会も変わります。かつて築いた①②③の関係もそのままではいられません。この間、私にとって大きかったのは、アメリカに二年間

留学したことです。向こうもまた大変に鬱屈した社会ではあるのですが、ともかくも日本を二年間離れたことで、自らを縛っていたものが一旦解除された感じがしました。そして帰国してみたら、以前感じていた抑圧や鬱屈の原因は、確かにそこに存在するのだけれども、自分にとってそれほど意味を持たなくなっていました。それだけ客観視できるようになったのでしょうか。この①「自分」の変化によって、私と歴史学の関係は今急激に揺らいでいます。

アメリカでは研究者の学問との関わり方は日本よりも多様です。論文とは全く違うテーマで小説を書いている人もいれば、研究と同じテーマで題材を変えて映画を作っている人もいます。そうした姿を見るにつけ、私もまた、表現する手段や内容を固定化せずに、時々に応じて大事だと思うことを、あらゆる方法で社会に投げかけていきたい、そう思うようになりました。もちろん歴史学も方法の一つでしょう。でもそれだけではない。私と歴史学との関係は、絶

対的なものではなくなりつつあります。

そんな私ですから、みなさんに歴史学だけをおすすめすることはできません。むしろ今の時点で史学科への進級を固く決めている人がいたら、全速力で止めたいと思います。生きていけば価値観や世界観は変わり、社会も変わります。大学生活が始まってまだ二ヶ月です。答えを一つに決めず、さまざまな学問に触れ、社会の成り行きもじっとらんで、不確かに変わりゆく自分を今しばらく楽しんでほしいと思います。専攻を決めるのはそれから遅くありません。これが伝えたいことの二点目です。

中央アジア史研究への道

野田 仁

連続講演会のお話した内容について、その要点を以下簡単にまとめておきたいと思います。それは、おもに二つの部分に分けることができます。

第一に、現在専門としてゐる十八―十九世紀の中央アジア史の研究に私が進むようになった背景について説明しました。一口に中央アジアと言ってもかなり広い空間になります、限定すると旧ソ連領、いまのカザフスタンに相当する地域に焦点を当ててゐます。この時代のカザフスタンは、東の中国（清朝）と西のロシアとの双方に臣従するかのようには振舞いながら、政権の自立を模索していましたが、その状況について、おもにロシア帝国と清朝の文書史料に拠りつつ組み立ててゐるのが、現在の私の研究ということになります。

当時カザフスタンに存在していたのは遊牧民による政権でしたが、遊牧民の集団を率いていたハン一族は、実はチンギス・カンの血を引く者たちだったので。思い返してみると、高校在学中あたりで、モンゴル帝国の歴史や、あるいは草原世界のことに関心を持っていたり、またちょうどその頃にソ連という国家が世界地図から消えてしまったという事件もありました。

それらの漠然とした関心を集約させた所に、現在の研究の方向性があるようにも思われるのですが、いずれにしても、自分の関心を掬い上げるきっかけはあらゆる所に見出せるということ強調しておきたいと思ひます。

大学入学後、私が本格的に東洋史の授業に出席し始めるまで二年間の時間がありましたが、その時間はおもに語学の修得に費やされました。東洋史に進むのであれば、まずは中国語だと思つたり、ソ連圏だとロシア語も必要だと思ひ直したり、あるいは中央アジアの言語はテュルク系だと聞けばトルコ語をかじってみたり、果てはイスラーム圏なのでアラビア語も要るだろう、とかなり手当たり次第にやっていた記憶があります。しかしその時に学んだことは―もちろん途中で挫折したり、放棄したりしたものも多いですが―、大なり小なり今の研究にも役立つようなものと思うのです。外国史の研究に史料言語の知識が必要になることは言うまでもないことですが、言語

を知ること、やはりそのことばが使われている地域の文化と歴史という背景を知ること無しにはあり得ないからです。

以上のような過程を経て、私は歴史研究の道をどうにか進み始めたわけですが、そこでの経験を踏まえて、おそらく講演会全体のテーマであると考えられる、歴史学において何を学ぶのか、言い換えれば、何を知ることができるとかという問いについて、自分なりに答えを探す作業が、講演の第二点目を構成してゐました。

結論を先取りすれば、歴史学の特質―あるいは魅力とも言えると思ひますが―は、人間の活動全てを扱っていることにあると考えてゐます。私自身の研究は外交を一つの切り口にしてゐますが、その点だけを取つても、政治の分野だけにとどまらず、貿易の問題が出てくれば経済ということになり、外交文書のやり取りがあれば、それは言語文化の問題につながっていきます。そのように考えてみると、自然科学の分野も含め「科学史」という方法があることは言うま

でもありませんが)、ありとあらゆる事柄を扱うことができることが歴史学に携わる醍醐味であると言っても言い過ぎにはならないでしょう。

また、東洋史・西洋史などではある特定の地域と関わりを持つこととなります。私の場合にはカザフスタンということになりますが、現代のカザフスタンの人と関係を持ち、彼らの歴史と向き合うことによって、それは一つの地域研究にも成り得ます。さらには、諸外国に出かけてその土地を見ることも魅力となるかも知れません。

このようにして確認できる、歴史学にかかわることの持つさまざまな可能性を最後に強調して、拙い講演の要旨を締めくくりたいと思います。

人間学としての歴史研究

—古代ローマ史研究の視点から—

梶田 知志

私が歴史学の道を歩み始めたのは、学部二年次に西洋史学専修に進級した時点で遡りますが、専修選択には随分と迷いました。当時、私は文芸専修に進級するつもりで、課題制作の準備に取り掛かっていました。しかし、その取材過程で自分自身の知識の乏しさを痛感し、自分にはまだ書きたいこと、文章で伝えたいことが何もないことに気がついてしまいました。結局、私の憧れはただ文章を連ねることそれ自体に向けられた非常に漠然としたもので、「何を書くか?」という根本的な問題について深く考えていなかったのです。そこで選択肢として急浮上したのが、西洋史学専修でした。その最も大きな理由は、歴史学が「文字発明」以来の人類の全営為を研究対象とし、学ぶことが可能な学問だと思われ、そこで

研鑽を積めば先ほどの「何を書くか?」という問題を解決できるのではないかと感じたことでした。

このような次第で私は西洋史学専修に進級しましたが、今度は研究テーマ設定という新たな問題に直面しました。すでに西洋古典語の学習をしていた経緯から、漠然と古代史か中世史と考えていましたが、研究対象との「絶妙」な距離感が私の理想に近いという理由で古代ローマ史を選ぶことになりました。

その後、卒業論文の準備を機に剣闘士闘技の研究に携わることになりました。剣闘士闘技とは、前二六四年の最初の興行から後四〇四年の「公式」の廃止まで営まれていた古代ローマの見世物の一つで、武装をした戦闘要員が特別な会場で死闘を繰り広げるというものです。現代の感覚からすれば、非常に過酷かつ残酷な見世物ですが、私がこの見世物に関心を持ったきっかけは、六〇〇年以上もの長い期間にわたって営まれていた慣行が、一人の皇帝の命により全